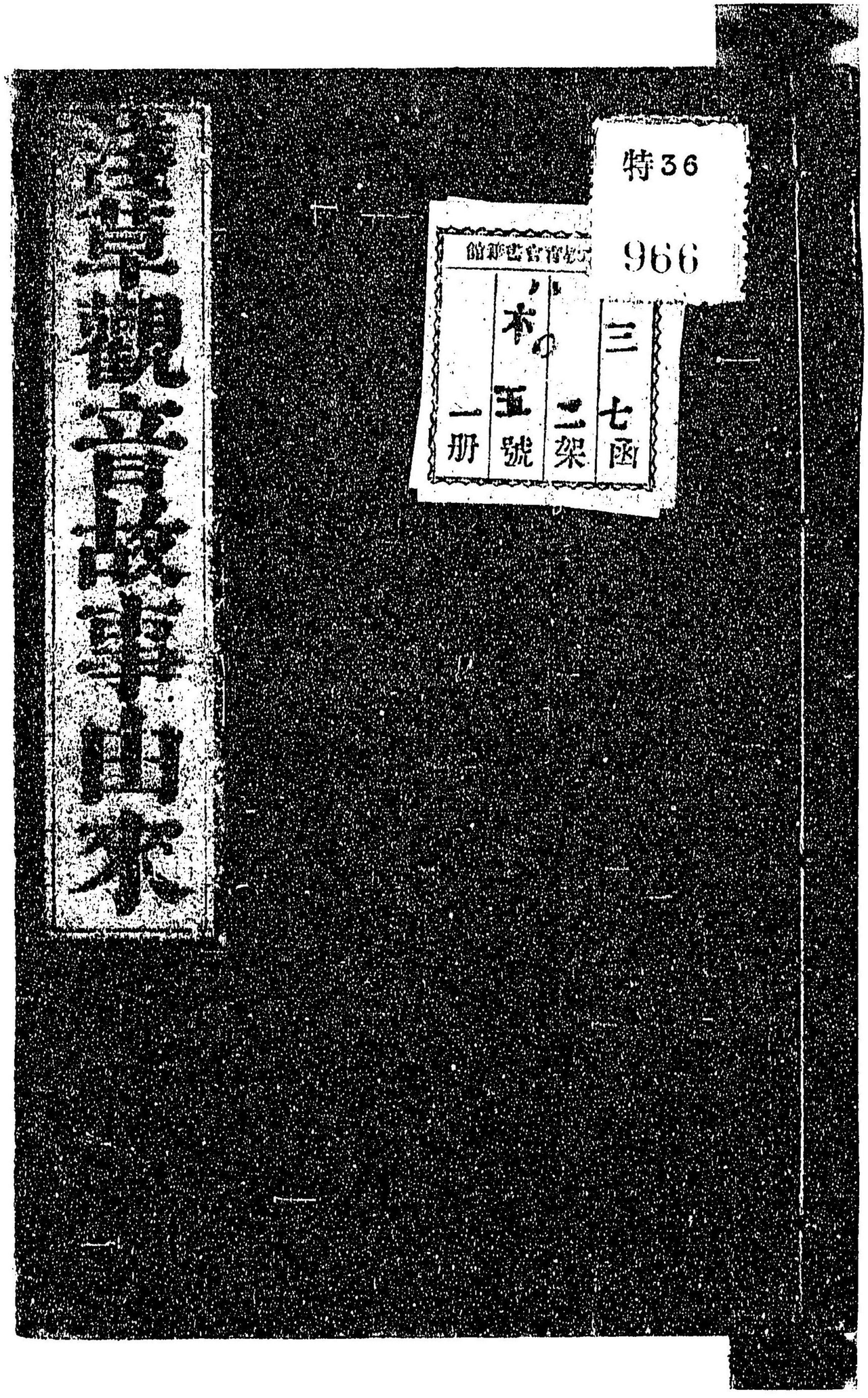


016808-000-0

特36-966

浅草観音故事由来

上村 清左エ門／編

M14. 12

ABE-0013

東京浅草
觀音故事由來

御届明治十四年四月十三日　弘賣堂

特36
966

東京都立図書館蔵書印

東京浅草觀音故事由來

柳武州豊嶋郡金龍山浅草寺の正觀世音菩薩ハ阪東拾三番の靈地ゆゑ三國無双の佛閣なり猶當時の地理を考ふるに南ハ廣澤烏越村あり西ハ下谷湯島村あり北ハ無戸村阿佐谷あり東ハ渺々たる蒼海ゆゑ大河一郷の四方を汀渚の方ハ安置奉る救世圓通觀自在大菩薩ハ人皇三十四代推古天皇の御宇真の中臣とゝゑる人故由有て武藏ゆけ浅草てふ辺ハ左迁の身となれを其家臣ハ濱成武成友成と云る三人の兄弟あり元来忠臣のまゝを達ゆけれい王の跡を

ひ當所に來て魚猟を業として近き浦に網を張りて晝夜と厭
ちび産業のかせぎをなーけるが同帝の三十六年戊子の三月
十八日殊に此日は晴明にて最閑なる朝まだき兄弟三人等が打網
に光を放つて初めて出現あり三人の人々奇異の思ひをなー
仲と結びて霊像を安置なーけるが其翌日近きあたりの童子らが
朝草を刈んとて十人連れて此處をよぎりけるに草村の中より光明
赫々たるかがやきけるに童子ども大に驚き其所に立寄見き
び大悲の像ありけるを思ひ合掌してふー拜し居る所へ
濱成武成友成等も來りて有り次第に物語りれば皆々
打寄かるる有りて紀佛躰を霜露をも奉らんとのうつさんとと
ろうとて人々寄合茅の柱を建てちがやを葺て家根とし心ばかりを
の御仮屋とぞ結びける故にこの仮屋を茅堂とぞ名けて後世に
誤りてアカン堂と唱ふ今の一ノ權現なり宿縁深き三人の
兄弟は三社權現と仰がれ十人の童子等は十社權現とあが
らる三社權現の祭禮は三月十七日八月の両日なり花園院の正和
元年神託に依て始まりとぞ十七日本社なる一山の衆徒法樂
修行あり神輿三基を本堂に迂坐し奉りて向拜の元に舞臺と
儲け未の刻に田樂あり前駈鎗十筋次に拍板三人太鼓二人笛

一人大太鼓獅子頭二ツ列てゐて本坊より出本堂の西を廻て三社の前より本堂の前より補理ひる舞臺ゐ登て初ゐ男獅子次ゐ女獅子次ゐ雌雄の獅子頭一度ゐ舞ひ夫より田樂の踊て終りて雷神門て出て山の宿ゐ終る此神事に出る者ども舊家より此祭て式世ゐ柏板の祭とらふ十八日則祭禮の當日也但し丑卯巳未酉亥の年隔年ゐ行ふ今日神輿三基淺草大通りを渡り參らせ隨身門より還輿あり

人皇三十五代舒明天皇十年正月十八日觀音堂火上時ゐ靈像火焔の中より飛出したのゐ人皆奇とて靈像示現して曰く昔此地年式積んで殺生せし處ゐり故我穢きる土を革て清淨の靈地とゐさんぐゐあゐ回祿の憂ありと告ゐふと欲其後數年を經て人皇七十一代白河天皇承暦三年己未十二月四日神火有て佛堂悉燒亡て其時靈像者樓木の上ゐ飛移てゐゐ此事世ゐ隱とゐく諸人益尊崇ゐり折ゐら義朝當寺に詣で彼樓を以て新ゐ觀音大士の靈像を造て本尊を腹とゐて奉て御堂を再建せり猶臺座ゐ鎌田兵衛改清奉行の書付ありとゐ其後人皇八十

代高倉院の治承四年源頼朝公三十六丁の田園を寄附せらる是は平家追討の祈念なと天下恭平の心願なるは其後人皇三十七代孝德帝の大化元年沙門勝海上人堂塔を建立ありける是ぞ淺草寺の開山の人なり又人皇六十一代朱雀帝の天慶五年安房の國主平の公雅とふ人心願成就の御禮として金龍山と再興ある此時たゞめのやをして本堂を更なり仁王門雷神門隨神門樓門三重の塔ホ至るまでことごとく造營せらるを田園數多と寄附しゆる威德弥十方一夫より七十六代近衛院の御宇なり源義朝参けの

有とより源平両家の勇士達も絶ぜと霊場ホ少と運ぶとてそなりぬ

人皇八十四代順德院の承久三年辛巳五月平政子大願と起し白檀の觀音像一軀白色綾羅帳一流信濃布千端寄附せと又人皇九十二代伏見院の正應二年己丑十月廿一日僧大輔聖詣でなりける所御堂大ホ損壞しけるを歎き勸進帳とりて再建と企て十一年と經て人皇九十二代後伏見院の正安二年庚子三月十八日功成就せかりしかば世くの武將或ハ御堂と修造し又ハ田地と附し奉と崇信大うと

ならびに就中足利十三代義輝公の御時北條家より再興の式
かごそうよ忠善上人を以て別當とし先師忠海上人を攝津國
なる細川律師定善の末葉伊丹三河守の子なりかくて後
東叡山に属せしが其後公より大伽藍を御建立ある然る
に又人皇百九代後水尾院の元和年中堂宇破壞せに依て
御再興あり棟札に大道寺駿河守とあるは又同御宇寛
永年中諸堂悉く燒失せ其後御建立あるを今に至るを
なりに無雙の靈場なり
本堂南面の額を觀音堂の三大字なりて大明福漳郡の
人龍邑の筆なり山門の額乃淺草寺に誰が筆とかを
なりに本堂天井の龍に狩野保信の画ぐ所にて中門の
仁王に雲溪が作とかを風雷神門の額金龍山に三國
筆海堂の筆なりとか此門に南の總門なりて昔此前に松の並
木ありしを今に町家となり並木町と唱ふ繁昌なりしが
明和五戊子年四月風雷神門燒失せ輪藏諸堂五重
の塔隨身門にかるまで善盡美盡なる結構なりしを
もつて隨身門とせて俗に重門とかを又鐘樓の鐘の銘を
元祿五歳壬申八月日別當宣存と誌せり

人皇六十九代後朱雀院の長久二年辛巳十二月廿二日大地震
あり佛閣悉く顛倒して永承六年寂圓阿闍利が堂を建
立し又人皇百代後圓融院の永和四年戊午十二月十三日
神火ありて堂宇悉く燒失して往古より丙丁の變九度
あり及ぶとのべども其度毎に堂宇建立有て次第々々に大
伽藍となり

一月六日修正會　除夜より六日に至るまで七日の間毎夕
難あり夕四時頃續經終りて僧一人鬼面を持面にかざして
出る又一人竹杖をもちて是を追ひ金龍を廻ること三度なり此間

かね大鼓亂調に打ならしとなり

一月五日　三社權現法樂已刻三間一答衆徒六人弟子
三人此をつとむ流鏑馬あり午の刻社人本社に至て祝詞神
樂を奏し後麻上下を著したる者片面に鬼とかく文字を書
的を竹の先に付て持て鬼の前駈をして鬼に出立たるのの是
添ひてゆくる社人騎馬にて鬼を追ひ本堂を廻りて其年の
恵方より始め天地四方へ矢六筋を放つ諸人此矢を拾ひて
守とす

一月十二日　溫座陀羅尼　天下泰平國家安全の御祈禱

あり今日より十八日まで盡夜二百六十八遍座の秘法修行あり

一月十八日　法華三昧法會　卯刻本堂に於て修行あり今夜松明と燈し供物等を奥山に焚捨ることあり

六月十五日　三社權現祭禮　今日未の刻田樂踊あり五人の舞人烏帽子直垂を著し色々の面を被て騎馬に先立次に神事舞太夫の頭何某烏帽子狩衣にて幣を持付添次に田樂の舞人柏板を持三人笛吹き一人太鼓打二人いづれも絹笠を冠る次に大大鼓等列る也本坊より出本堂の前に構へる舞臺に登て柏板踊てあり事終て騎馬の者馬より下て三平二滿の面をかむりて舞てあり其外替りて舞て末に三人太刀を拔持て舞てあり此馬は舊例に三河島より出る田樂の舞人囃子等にいたるまで久保舊家に其上觀世音出現の時菊を結び安置せし十人の草刈童の末裔なりと云ふ此神事八鎌倉の右大將再興まし〳〵しとかや傳ふ

十二月十二日　觀世音煤拂開帳　十二日の申の刻より仁王門を閉て後開扉あり講中の外拜てゆるさず今日八二時頃より開帳在

同十九日　雷神門前簑市立　簑を多く商ふ三月のごとく

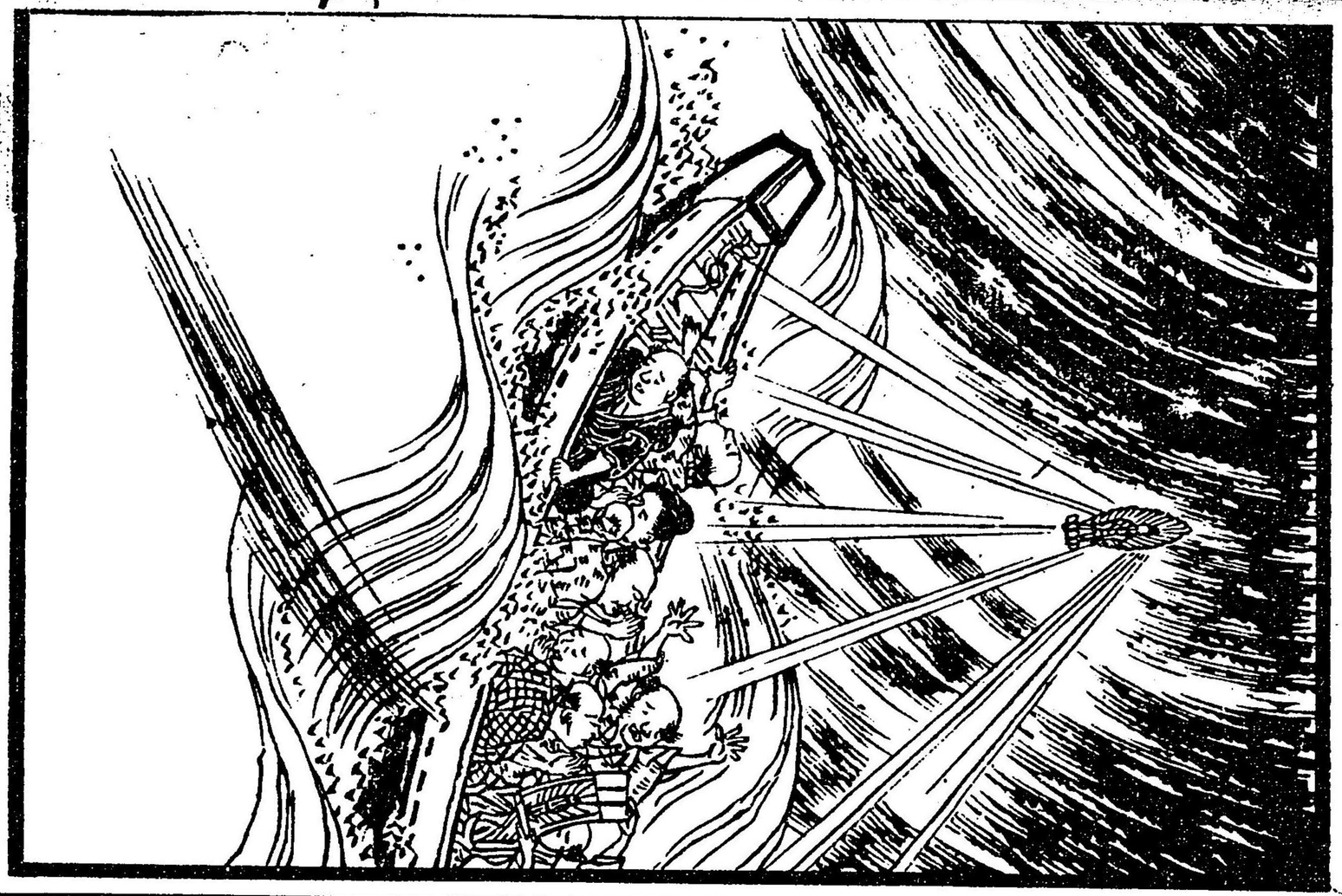
同觀音節分會　寶前あそ一山衆徒般若經を來年の日

數々讀經を終て豆を打又外陣の左右の柱に高く架て
構へこれに登りて節分祈禱の守札をまきあらす諸人挑拾ひ
て堂中混雜せり但し平産の守りとのひ傳ふ
同十七日十八日浅草寺年の市當日境内にふ及ぶ南に並
木藏前通西に門跡下谷辺東に花川戸五日妻橋辺小馬道
通りまで寸地を漏さず仮屋を補理し新年の儲けとて注連
飾りの具庖厨の雜器破麈弓手毬羽子板等の遊び其
餘種々の祝器とならべ商ひ都鄙の人是を求むること恒例と
晴雨を嫌はず群集すること昼夜の分ちなく世人ことに
暮の大市と唱へるも宜しうして
其昔浅草辺に草木生茂り人家稀にして旅人宿を求むる
ことかたし爰に野中の一ツ家老婆一人の娘を持て住けり此菴に
旅人を留めて石の枕浅き臥けるを上より石を落し一頭を碎き
衣類を奪ひ其躰を此池に沉めぬ斯すること既に百十九人に及
千人に滿るとき一人の旅人此菴に宿る然るに浅草の觀世音
假に草刈に寳ひ笛を吹なぐら此菴の前を過りあるとき
其笛の音に○日に暮て野に宿るに浅草寺の
家のうちと正しく言語にてはなはだ聞えけるを旅人ことに

きて甚不審早々臥戸をとして密に伺ひけるに夜更て彼の石を老婆のかと思て見て大に驚き夜にまぎれて逃出して一の御堂に隠れて夜にあけ夜明て見れば常に信じ奉る浅草寺の御堂なりければ弥以て信心胆にそめけるとぞ又一つに或時観音児と現じ姥が菴に宿りぬ姥が娘兒の美なるに惑ひ兒の臥戸にかくれて添ひにけり姥斯と知るに程よく石を落しかけて娘の頭を砕き是をかなしみ此池に沉めて死せり其霊大蛇となりて人民をなやます依て二社の神にいのりひければ悪霊くつく守の神となり流行病の難をさけるとかや

旅人に引の枕をさせあぐらこのたちばりをなどや結ぶん　茂睡

文化五戊辰の年七月廿八日信濃国岩村田の鍼医武田立齋と云る者老母と妹を召連江戸へ用向有て出る道中戸田の渡かゝりける時俄に大風起て船中へ大波を打込けるに来合の人々申皆く大に恐れて騒ぎける所立齋の母なる人日頃浅草寺の観世音を信心なりける眼目ふゝ眼を眠を一心不乱に観世音を念じける烈風弥荒つゞ今に船もくつがんとしける人々聲を揚てこゝを如何と叫ぶ船中上を下へと



傳法院
神道禊教院

狼狽迴てけるに老母尚も心をたちろの懐中より觀音の御影
をひざに持せ来りし分持の上に載置此災難を救たまへと觀世
音とあらうへひざく大音聲に唱へるがら御影の掛物をさらと開き
けるこゞ不思議なるかな船を目掛て吹来るやうに思ひしに颶忽向の
大木を吹倒しけるゞ其間に船は向ふの岸へぞ着ける乗合の人々
船より下て皆〻老母の前に来て手式はさ備ら御影をそあやゝ
命を助つるに御礼言語に述がたく厚く礼をいひつるのみ
今をこける是偏に觀音の利益仰でも尚餘りあり
本所立川辺の諸侯の家来に勝田文弥と云る若者有生質

伶利にして持前の武藝は何に拔目なくなんづく弓術は百發
百中の妙を得る人なりしが勝負に残好き博奕に
金錢を費ること度〻及びけるゆゑ遂に此事太守の御耳に
入り以ての外御立腹なる如何若輩とは申るゞら近習役を
勤る身分なる博奕を致すとは見下たそなれりの
一藩の諸士のいまだめなる相成ことなるべ不便なるも切腹
申付る間下屋敷に去て支度をなすべしと仰出されける
御役人打寄相談の上文弥を呼出し右の趣申渡はべ
文弥恐入奉て御沙汰の趣畏て御請申上御下屋敷に至

又既に其場にのりけるに九寸五分を以て腹にぐさと立てけるに石に當るが如くして白刃通らざりけるに不審にありひ又持ち
かへてぐさと立てけるに同じく皮ばかり切ざるとあるを文弥検使に向ひその
趣をのべ直に公儀致しくまよと頼これども検使の人こそ其意に
応ぜず此由太守へ言上に及びける所太守以ての外御立腹もこの
手ぬぐひ以てぐさと立てる刃の通らざるとやある弥左あらば検使の者共
手ぬぐひ持添へて切まべしとのことあるに早速御沙汰のあるべき取計
たんとそ文弥は其意を通じ手を持そへてぐさとそけるところ
銭石にあるが如く刃とても通ぬかしとて少しも受つけざるとあるを

検使の人こそ奇異の思ひをなしこの心を極めてそけまべ切先
火花パット立揚ると等しく切先三寸程折て飛散る人こそ
大に恐れそその趣早こそ太守へ訴へけまべ太守聞召し御眉を
ひそめさせられ仰せ出されけるは先その儀暫時指置べ
しとのことなりそのその夜太守の御夢に一人の童子御枕
元に来り我は浅草寺よりの御使なり勝田文弥が罪死刑に
當らざるかと思へば御夢さめぬ太守御心の中に不思議
なるかりのうち早こそ御近習頭井上半三郎とやらの御家来
を御側へ御呼寄勝田文弥が身の上を委しく御吟味ありける

所幼年より致し母の遺言を守り浅草寺の観世音を信心
仕り趣具なる物語り及びけるに其なるを半三郎より委
く言上ず及びたまべ太守も深く御感心ありて此度の文弥が
罪御免仰付られ此上身持不埒ことの如く忠孝を重んず
猶信心怠るべからざるとのこと此一條に相済とう文弥に観
世音の利益より不思議なる命助かりけることを信ぜん
胆ずとて観音経を讀誦せんとて佛檀へひらひ見まに此程
まで少しも疵付ざる尊像の掛物御腹と覚しきところ
尽く探て破るに斗りなるぞ有り至りける是全く文弥が切腹

を御救ひ下されし印とぞ思ひ侍ぬ最く有がたきことなく
筆ず印なる恐きあり此ことに享和元年三月廿日のことなる
文弥が其場ず至りしに同月十八日のことなりとて此ことしに
蕉雨園自寛が枕の塵とゝなる草紙ず載とう
日本橋通一町目の横町稲荷新道ず荒木適齋とゝなる
書家あり此人の老母に若きことに青山侯ず給仕ことなり
老女あり子供のときより浅草の観世音を信仰ひ廿二歳
ず折ず御代参を仰付られ浅草寺の観世音へ詣で奥山ず至り
あちこち遊覧なる折柄田舎侍二人跡ずあり先ずあり歩

きーぐいうぐ者さうけん此女中の袖へ刀の柄を指入けるゆゑ女中大ふ
驚き袖を拂ふとまとろる侍女中の手をとらへ只失礼する女
うる武士の魂へ袖を引かくるのみならず一言の詫も述ずたゆまず仮ふ
打拂ふとも不届至極の仕方ありそのまゝあへ指置ずとて種
じさるぐふ悪口雑言ひたのりけるゆゑ若黨小者まで出てらくと
詫言らへども中く聞入まじ一人の侍へ後へ廻りて帯をとらへて動ず
女中の難儀見るふ忍びゞ忍体爰ふ極まりくるやうなら本堂のうち
より鳩一羽飛来て木の枝へ留らんとして糞をまきうけるゆゑその糞
かの女中の手ぶくろ居さる侍の天窓の上へ落けるゆゑ不届

ある畜生なるとくつ顔をおゝひるゞら其所へ平伏ける是ふ
驚き今一人の侍も何事やらんとふり上見まじ同くふとらそ
打ふう此隙ふ女中へ若黨小者ふ目くでせーとをくふ
此所を立去りけり跡ふ聞ば此侍のとのところへ打伏けるを
鳩の足ふ眼中へ砂をとり投蹴込まれしゆゑ痛ふさへ其
所へうちふたりとる是偏ふ観世音のまもりしる所ふて
速ふ悪をとらへ善を助じあふ霊験仰ぐも猶餘ありまし
況や侍のとのゞ方より支を仕ちゞめをる種ふして婦人を
困せんとせーを観世音の悪をゆゑ先鳩を仕へ糞を天

窓ゟ落さゝゟ其上ゟ砂をとりて眼中ゟ入れて両人の侍の手にとる
さたるゟど其利益仰ぎこふとむべし
谷中寺町ゟ久兵衛とて瀬戸物焼はぎて渡世ゟ出るゟのあり
妻ゟ後妻ゟ先妻の娘一人あり年十二歳ゟ至て伶利なる
生まれゟ二親ゟ孝行なりしゟ此後妻この娘を悪むと仇敵の
ごとくなり或時田舎の親類より手作なりとて茄子を貫ひけ
るゟ最大なる青
蛾の一疋茄子ゟ取付居たりゟ後母見るより密ゟ是をとり
隠し味噌を摺り仕廻ひそその味噌を少しとり分別の器へ

うつさゝ青蛾を摺つぶしてこまゟ交その味噌ゟ焼る鳴焼
と娘ゟ喰せけるゟ娘いかなる工ありとゟ露ゟらびとゟ成人食し
けるゟ聊替ることなれば継母ゟ不思議ゟ思ひ心の中にそふ
ゟ青蛾ゟ毒虫ゟそこを食ゟ成ゟ忽死すると聞しゟ
さそゟ空言ゟありけるゟと顕ゟ成て居けるゟ継母俄ゟ腹
痛を催し吐ゟ下ゟ七転八倒の苦しゟ四名久兵衛ゟ
狼狽騒ぎ早ゟ近所の鍼医を呼び手当をける所少しゟ
苦痛ゟむゟゟ見えしゟ忽ち発狂してゟべてゟるゟ娘を害
んとゟるゟ毒を以てゟ一所其毒娘ゟ中らゟ却て我身を苦

むることこれ全く觀世音の御罰なり救せのまや觀世音と大
聲上て苦しける久兵衛是を聞て日頃娘とはまをくまること
心得居るを毒殺せんとまぞの思ひも寄ぞ己が罪なのれ責る
自業自得不便なぐらも捨置ぐーとそ早此事茂里方へ
離縁ゐ及びけるぐその後この女先非を悔ひて既にまをー度言
入るを久兵衛止て得ぞ人の進めゐまをせ既ーる所その
後打てかわを心底を娘を愛るを産の母も及だねだかり憑て
のことをまぞとゐ大ゐ相違ゐるをまぞ久兵衛も宿を娘も
實母同様の孝行を尽ーけることを目出さけを此娘七ツの歳よ

り觀世音を信仰ーるとる其利益ゐて毒殺の災もなく
无支ゐその場をのぐを此ことこれ偏ゐ觀世音の御恵ゐと
聞者感涙を催ゐーけるとぞ
芝新銭座ゐ東條右門とる武士の浪人あるーが此人佛
學を好ゐを頗るその道のを残ゐる人なり此頃大坂より澤
蔀とのる佛師江戸へ來ゐを花川戸ゐ旅宿ーを居けるが
若きころより浅草の觀世音を信仰ゐーを尊像を刺みる
ところ其作絶妙なりとを人〻競ひぐこれを頼こけるとる此を
右門きく兼を所持せーを沉香を出ーを觀音の像を刺ゐまを

部方たのこける所部承知の趣い其合けまども所ミとりの注文
やがうゐ重てある上ゐ右門のこゐ忘るゐあらねども思
ひの外に延引ゐ及びる右門より度〻の催促その度ごとゐ
若干の贈物とゐけるゆゑ部ゐ氣の毒ゐ思ひ色〻と指繰
漸のことゐて出来せり最日數一年たらずゐかゝてるよう右門と
も我見るゐ如何ゐ絶妙の作まゝ大ゐ歡び早速謝儀ゐ
及ぶんとて金子取出して目録と包まんとて不斗思ひけゐ
やとよ一年ゐ長引さる上ゐてゆゑ出来せ上とゐまゝ
どゐ厚く謝とゐり及ぶず殊ゐこの金の中ゐ不通用の

金子ゐまゝこれと交て贈るべーと半分ゐ不融通の金交
是と贈つける部ゐこの古文絶てもゝび其後ゐ至右門金子入
用のこと有て是と渡ーるに其人見て此金子ゐ見分うねゝど
外の金子と取替呉ゝとこの上ゐ名外の金子と出ー渡ーけるゐ
又云是ゐ前のようゐひゝゐ悪ーとゐて請取ゝど右門不審
ゐ思ゝども詮方ゐけまゝ夫これと見分て渡ーける跡ゐて金高
と數ゝ見まゝど悪ーとて請とらざる金全く部方ゝ贈ゝー金高
けまゝど爰ゐゐて弥不審ゐ思ひるゐまり或日部ゐ面會ー偖
先日謝儀ゐ贈つゐ金子服方より請取ゐ伏ゐて進上致ーゐ所

アノ金子の中へ融通いたし金子是ありし貴君へ贈りし中
申定めを宜かゝざる金子も是有りて近頃赤面の至耻入り
右の金子へ引替申べしとの部きそ丈へ御念の入る御喜ぶ
ども私方へ頂戴の金子へ何喜ばれるきと見え四五軒へ拂ひ
一軒も請取ぬと云家へ是なくば決して御心配ハ及ばぬと答へ
ゐる右門へ弥不思儀ハ思ひ考へる所是全く我等が邪のところと
観世音の外ゆさせるまうくべひ善らゐ金子と部ハ贈ると思ひ
しへ却て善金を善金と思ひて残せし金子へ用便不成黄金と
豈計らんや九夫の区さ佛学ハ心とかむる者ゝ為とて生涯と全

ふせんとおのひもよらびとて直さる髪ときうて發心ゐゝうとぞ又部
ゲ請取さる金の融通ゐゝとしへ金全く贋金ゐそゐゐく二元来正銘の
金ゐゝ然ども右門ゲ工ハ落ゐゝさるへ是偏ハ観世音信仰
の利益ゐるべし何の頃ゐありけん丹波の國ハ宮成とゐる富家
の人あり其頃都ハ眼清とゐる佛師の名人ありこの佛師観世
音と信ドム毎日観世音と信ドム毎日観音経三十三遍ぐ
讀しゲ或とゐ丹波國の宮成乃ゝさうの頼こゐゝく丹波ハ趣き
ける所観音の尊像と三十三日乃間に作り出してさべとのこと眼
清請込ゝ一日もゝゲ成就しゝうはとぐ宮成大ハ歓び

過分の作料引手物と與へけるが跡をそ思へば余に莫大のことなりと
心ばせ俄かにくるり取返さんと思ひ大江山の林下に待受て佛師
のかへる所を打殺さそ尽くたぐ取早く家に飯をけるが其後人の話
ときけば眼清を都へかへり佛を作るとて弥繁昌をりとのこと宮成是
ときて不思議に思ひ持佛堂に行て見れば我が作らせ給へ觀世音の
尊像に多くの太刀疵ありてその所ようたがへる流血いでなこれ則ち
眼清の毎日怠らず觀音經を讀誦する佛力なり宮成是を見て大に
驚き先非を悔そ忽發心出家をそ我家を寺とし菩提寺と名づ
け此觀音を安置しとそ丹波の由留田觀音とかうまとうや

千住の竹の塚に李四郎とかくる百姓あり霜月の中旬近所より
出火して既に李四郎の家もあやうく然るに此者日頃淺草
の觀世音を信仰をける故脇目もふらず一身不乱に觀音經
を讀誦しけるところ隣家まづ焼來りて火事の俄に風變
りて李四郎の家斗殘りることふしぎなれ火鎮て後人寄集て云
けるやうは觀音の利益あらたなれ折能く風の變じとそ誹謗
する者も多くけれど李四郎は少しも弄びのうさなる左をもあべし
杯あひもちひて夫より早く仕度して淺草觀音へ御禮参りをなける
やうは是則説人大火不能焼の場なり

青山同心町の木村政八と申す人ありて上州松井田
辺へ旅行せし所途中にて道を迷ひ思はぬ野原へ出け拵柄
俄の野火焼来りて更に逃るべき道なく心体疲労極まりて一所兼て
浅草観世音を信仰の事なれば一心に観音を念じたりしに
不思議にも風変て外の所へ火のまはり盛に燃上りたれども
政八の行道へ下火とり燃ざるを四辺そこ〳〵に此所とりけぬけ
辛き命を助りしこれ偏に観音の利益更にうたがふべきこと
にあらず最も有がたきとより常に念じ恭敬して忘ること有
間敷事

御届明治十四年四月十三日
出版同年十二月

東京浅草區花川戸町三拾二番地
御經過帳製本所 編輯出版人 土村清左衛門

[illegible]四編五冊

東京圖書館
新門四部
十四類
南
架
號